

会員の広場



蔵書とコロナ

松下 滋（東京）

内務官僚だった父が残した法律の本は処分してしまっただが、旧制一高の向陵誌、法学部の恩師牧野英一博士の日本刑法、内務省史全四巻だけは大切に保管してある。半世紀前、任地ロンドンから持ち帰った洋書など私自身の蔵書もあるが、圧倒的勢力を占めているの

代日銀総裁はじめ伝記、日本金融史はじめ歴史もの、社史、各種事典、そして古典と洋書。納まっているのは、私一家が暮す庭続きの一角。吉野は、自宅の書斎とは別に、二号書庫を建てていた。ウイーン郊外メルクの修道院の書庫に似たものをと自ら設計した。2階建て20坪。1階の天井は高く面積は広め、2階の天井はやや低く面積は狭め。机は1階に二つ、2階に一つ。書棚は、床から天井まで作り付けで、1階は3重9段、2階は2重7段と2重6段、2階に向かう階段の片側も全面書棚。60歳の時、人に問われて、軽井沢の本を合わせ「蔵書は4万冊近く」と答えていた。膨大な資料を含め「書斎こそわが城」だった。90歳で没後、著作在庫の一部は、母校東大

は、家内の父・吉野俊彦が残した本と資料だ。

第一は、著作のストック。「インフレーションの経済学」（1948年）にはじまり89歳の共訳「熱狂、恐慌、崩壊―金融恐慌の歴史」（2004年）まで130余冊を出版していた。65歳の時「サイドワークで書いた原稿量は著作だけで2000字詰原稿用紙13万枚」と言っていた。第二は、日銀勤務時代の金融政策の機微に触れる記録資料、国際会議資料。第三は、寄稿などが掲載された新聞、東洋経済・エコノミストはじめ週刊誌、中央公論・文藝春秋など月刊誌。毎週のように書いていたから書棚に溢れている。第四は、金融、財政、経済全般、法律の本、文学書、文豪・思想家・経済学者などの全集、勝海舟・渋沢栄一・歴

や市川市の図書館に寄贈。金融政策に関わる資料1万3千点は日銀に収納。他にも処分しつつ15年経過。が、書籍の山はびくともしない。何とかしなければと思案していたところに、新型コロナウイルスが発生。やるなら今しかない、と思いついた。まずは新聞と雑誌。一紙一冊内容を確認、寄稿や座談会の部分だけを切り抜いてファイルへ、他は消却。4か月間、中腰での作業、同じ動作の繰り返しで右手人差し指が痙攣。抗炎症剤テープを貼っているが、今年82歳、もたもたしてはいられない。本丸・第四群がある。感染症を避けた巣ごもり生活で、晴読雨読。今年こそ、義父への感謝の念を胸に、万巻の書の整頓、整備に本格的に取り組みつもりだ。